

1. 教育の責任

私は本学幼児保育学科に所属し、幼稚園教諭免許及び保育士資格の取得を目指す学生たちを教育・支援すること（保育者養成）が役割となる。私の担当する科目は、保育者養成科目において、必要な科目に指定されている。そのため、将来の保育者となる学生には、保育のための質の高い知識・教養を身に付けることはもちろん、子どもを心から愛し、真の子どもを見つめる眼を持ち合わせ一人ひとりの真の子ども理解に努め、すべての子どもたちを認め・受け入れられる多様性を持った保育者になってもらいたい、という願いを持っている。

青森中央短期大学幼児保育学科での担当科目は以下のとおりである。

科目名（対象学年）	概 要
教育総論（1年）	教育の持つ意味や役割、歴史的経緯、教育思想等の基礎・基本を学び、自分なりの教育観・子ども観を確立することを目的とする。 卒業必修及び、幼稚園教諭免許状・保育士資格取得のための必修科目である。
教師論（1年）	保育者の仕事に関して、制度的な位置づけを踏まえながら、保育者に求められる資質・専門性について、具体的な事例を基に学んでいく。 幼稚園教諭免許状・保育士資格取得のための必修科目である。
保育カリキュラム論（1年）	保育における指導計画の重要性や指導計画の書き方、また実践における評価の意味について学んでいく。 保育士資格取得のための必修科目である。
保育カリキュラム研究（1年）	前期の保育カリキュラム論において、教育課程・保育課程、保育計画の持つ意味や重要性について理解したことを踏まえて、実際に指導計画（部分指導計画、全日指導計画、週案）を作成する。 保育士資格取得のための必修科目である。
教職実践演習（2年）	保育者養成の学び中で修得した知識・技術・総合的な判断力を振り返り、自分の課題を把握した上で、演習を通して保育者としての実践力を高めることを目的とする。 幼稚園教諭免許状取得のための必修科目である。
教育実習（1・2年）	教育実習を行うために必要な幼稚園での教育・保育理解、幼稚

	園教諭の仕事の内容理解と実習を行うにあたっての基本的なマナー等について学んでいく。実習の事前及び事後指導を行う。幼稚園教諭免許状取得のための必修科目である。
保育実習指導(1・2 年)	保育所実習を行うために必要な保育理解、保育士の仕事の内容理解について学んでいく。実習の事前・事後指導を行う。保育士資格取得のための必修科目である。
教育実習事前事後指導 (1・2 年)	教育実習を行うために必要な幼稚園の理解、保育者の役割、内容理解について学んでいく。実習の事前・事後指導を行う。幼稚園教諭 2 種免許取得のための必修科目である。

その他の教育活動

① **特別研究**：2 年生を対象とした特別研究指導がある。今年度 4 名の特別研究指導を行った。保育に関する研究というベースは共通であるが、担当学生個々の問題・関心は各自様々であるため、研究内容も多岐にわたる。いずれのテーマの場合も、文献検索、引用の仕方といった基本事項から問題解決に至るまで、学生が自分なりの結論を提示できるように指導している。

昨年度から多様性を育む教育を保育園・幼稚園の子どもたちに行う、というテーマをもって 4 人で青森中央学院大学在学の留学生とともに異文化理解教育活動を計画し附属園だけでなく青森市外の保育園の子どもたちにも実践した。今年度は留学生の母国の伝統的な遊びを青森中央短期大学附属幼稚園・保育園の子どもたちとともに行った。この異文化理解活動を保育園や幼稚園の子どもたちへ行いたいという考えに至ったのは、自分たちも授業を通じて他国の学生と触れ合った際にこれまでと考え方が変わり、視野が広がったということを実感したことからである。実際に子どもたちに異文化理解について保育実践を行い、そこでの子どもたちの反応から、少しでも子どもたちの考えや視野を広げるきっかけをすることができたと実感できたようであった。今年度は前年度から行ったこの活動の成果について冊子を作成し公表した。

2. 教育の理念

ほとんどの学生が、幼稚園教諭免許状と保育士資格取得を目指して履修している。将来の保育者には、子どもを心から愛し、真の子どもを見つめる眼を持ち合わせ一人ひとりの真の子ども理解に努め、すべての子どもたちを認め・受け入れられる保育者になってもらいたい、という願いを持っている。一緒にいることで子どもに安心感・親しみを持ってもらえ、どんな時でもありのままの子どもを受け入れられる多様性を持った保育者、そして常に子どもの心に近い保育者になってほしい。学生自身も自分の理想とする保育者に近づくために、人を育てるための慈愛と幅広い知識、教養を身に付けたいと思っていると思われる。この点において、保育・教育の根の部分を担当する重要な責務を負っており、保育・教育の本質を考

えられる授業が提供できるように努めたい。

また、地元の地域の現状を踏まえ、未来を担っていく子どもたちの育成はもちろん、家庭の支援も含めて地域の子育てに関して身近な問題として捉え、支援に努めていってほしいと考える。

3. 教育の方法

上記の教育理念を達成するために、講義において以下の4点について行っている。

一つ目は、講義において特に、イメージをしやすいよう具体例（実際の幼稚園・保育所・小学校の様子）を多く挙げながら、学生に分かりやすく話すように心がけている。特に、教育総論は学生にとってはこれまであまりなじみのない硬い文章や用語が多く、難しいというイメージが持たれていることが多い。そのため、なるべく文をかみ砕いて、保育現場に置き換えた具体例を挙げ、分かりやすく説明するようにしている。

二つ目は、課題として提示する際に、講義の要点を簡潔にまとめ、分かりやすく説明する文の書き方を覚えていくことができるように行っている。分かりやすく説明するには、自分がそのことに関して理解していなければ分かりやすくはならない。講義内容を理解することとは、どういうことなのかということについて知る機会になると考えている。要点をよく捉え、具体例等も挙げながら分かりやすくまとめられていたものについて、次のフィードバックの時に紹介している。

三つ目は、グループ活動を行う際に、各自考えたものについて学生同士がアドバイスし合うように計画している。友達の考えたことについて、教員のように改善点を考えることで学生同士の気付きにつながり、それが自分の理解へとつながっていくと考えるからである。また、特に教師論の授業においてであるが、少しでも子どもたちの心に近づくために、学生各自の保育者らしい言動をふり返り記載、そしてそれに他学生がコメントを付ける、ということを毎週行っている。いかに子どもの心に近づいた言動が取れていたかを振り返るとともに、友達の言動に対してプラスのコメントを記載することで、保育者として子どもに肯定的な言葉をかけられるよう行っている。保育カリキュラム論においては、指導計画を作成するにあたって、個人での作成以外にグループで作成することも行っており、自分では気付かなかった配慮点や活動の工夫を知ることのできる機会としている。

四つ目は、一昨年度から多様な考えを持った保育者育成を目指して、保育カリキュラム論・保育カリキュラム研究の授業において、青森中央学院大学系法学部の学生（日本人学生、留学生）と授業連携を定期的に行い、他国の文化・考え・言語を知るという活動を行っている。特別研究でも留学生との連携を定期的に行い、留学生をともに異文化理解教育を青森市内・外の保育園・幼稚園児へと実践した。

この他、学生にとって、どんなことでも気軽に聞いても良いという安心感を持ってもらうために、講義だけに限らずいつでも相談に応じることも話している。

4. 教育の効果

実践の結果、初めは説明文の書き方が分からなかった学生も、回数を重ねるごとに、課題に対して適した用語を使って、自分なりの言葉で説明する文章を書くことができるようになっていた。フィードバックの際には、分かりやすく書いている学生の復習プリントを紹介し、どういう点が良かったのかを具体的に解説することを心がけた。そうすることで、自分で考えた保育の場での具体例も組み入れて書こうとしたり、より詳しい説明となるように工夫して書こうとする学生が次第に多くなっていった。保育者としての言動をふり返ることにより、ポートフォリオとして日を追うごとに自分の言動が深みを増していることを感じることができるようで、少しずつ自信がついてきているように思う。授業評価アンケートの結果からも、内容理解の項目より、分かりやすく説明するには内容理解が前提であることや、学生同士アドバイスし合うことが自分の気付きや理解につながっていったことが分かった。

また、他国の学生との交流活動を通じて、自然にお互いに助け合い・協力する姿が見られたり、お互いに知らなかったことや今まで当たり前だと思っていたことがそうではなかった、という経験ができたようで、柔軟な考えや認め合う精神を養うことができたように思う。そして、自分たちが経験し感じた感覚を幼稚園・保育園の子どもたちに伝えることで、多様性の感覚を持った保育者として子ども達を観ることができる保育者となることにつながると思う。また学生自身も実際に留学生と共に、子どもたちに異文化理解について保育実践を行い、そこでの子どもたちの反応から、少しでも子どもたちの考えや視野を広げるきっかけをつくることができた実感できたようであった。

これからの、課題として、自分自身学びの積み重ねを行いより分かりやすい授業の工夫に努めていくこと、学生の授業内容への興味・関心度を高めるための毎回の授業後の改善に努めていきたい。学生が保育者として、保育の質の向上のために何が必要なのかを地域性や教育問題等視野を広げて考えられるよう授業の工夫を行っていきたい。